

赤褐色の球形モニュメント -土地と産業の記憶装置-

葛飾区産業観光部観光課主査 学芸員

谷口 榮



JR常磐線の金町駅の北側に、東京理科大学葛飾キャンパスが平成25年(2013)4月に開校した。開放された空間に現代的な意匠を配した校舎がそびえ、若者が行き交う姿は、今までの葛飾区内には見られなかった、新しいまち景観である。

キャンパスの周囲には、「葛飾にいじゅくみらい公園」(葛飾区新宿6-3)が整備されている。この公園は、計画段階から区民参加と協働によって整備されたもので、面積が約7・1ヘクタールと区立公園としては最大の広さを誇っている。環境とユニバーサルデザインにも配慮し、多目的広場や大規模な災害時には避難拠点として機能するよう防災設備も整えられており、平成25年度第29回都市公園コンクールで国土交通省都市局長賞を受賞している。

この現代的に空間演出された大学と公園の風景の中にひととき異彩を放つ赤褐色の大きな球形のモニュメントがある。この鉄の球体は、通称「地球釜」と呼ばれ、かつてこの地に在った三菱製紙株式会社中川工場(以下、「三菱製紙中川工場」と略す。)で損紙(そんし)を蒸して再生するための蒸釜である(図1)。



図1 「地球釜」

三菱製紙中川工場は、本区における近代工業の先駆的な工場として、この新宿の地に築かれた。その経緯を簡単に記すと、合資会社三菱製紙所は、日露戦争後に国内の紙の需要が増加したことで、紙の大消費地である首都東京が紙の供給先として今後重要な位置を占めるものと注目し、本所方面への連絡が容易で、鉄道もあり、横浜方面と直接船で航行できる適地に工場の建設を計画する。

東京市部に近く、本所と同じ東部に位置し、の常磐線が通り、中川と江戸川に挟まれた葛飾区新宿付近が工場の建設地と選定され、工場名を「三菱製紙所中川工場」と決めて、大正4年から工事に着手して大正6年から操業を開始した(図2)。

創業当初に製造された製品には、煙草口紙用紙をはじめ、教科書用紙、模造紙などがあり、その後、大蔵省印刷局から受注した葉書用紙も重要な製品となった。



図2 三菱製紙中川工場(昭和9年三菱製紙株式会社提供)
右上に金町駅、左下に中川と接続する船留が見える。

第2次世界大戦の戦時中には、写真印画紙原紙(バライタ紙)の製造をはじめ、軍関係の地図用紙等の抄紙や、新紙幣の抄造と旧紙幣の処理なども行っている。

戦後、中川工場は、昭和21年(1946)4月に大蔵省から紙幣用紙抄造管理工場に指定され、戦争で被災した大蔵省印刷局大路工場が復興する昭和24年まで紙幣用紙の抄造を行った。

損紙等をパルプにする作業に使われたのが、昭和20年(1940)から昭和21年にかけて設置された球形の蒸釜「地球釜」である。この蒸釜は、厚さ16mmの鉄板32枚を鋸で球形に仕上げたもので、大きさは最大内径4.27m。釜の中に損紙等(5t)と水(9,000ℓ)を入れて、毎分1回転の速度で回転させながら蒸気を注入し、紙の繊維を解きほぐして再生原料として使用した。

まさにこの「地球釜」は戦中から戦後復興という戦争から平和への過渡期を経験しているのである。「地球釜」は、球形というフォルムだけでなく、操業時の回転する様子から呼び方が生じたものであるが、私には世界を巻き込んだ大戦と、大戦の反省から国際平和と安全の維持、経済・社会・文化面の国際協力の達成などを目的する国際連合が誕生した地球の姿にも見える。

実は、三菱製紙中川工場は、この地域の災害の歴史を記憶する「場」でもあった。最近まで残っていた2棟の煉瓦倉庫の壁面には、大正12年(1923)9月1日に発生した関東大震災によって生じたクラックが残っていた(図3・4)。関東大震災による都心部での被害状況は知られているが、郊外で



図3 煉瓦倉庫 金町の煉瓦で造られていたが、今は取り壊されている

の被害状況を知ることでできる資料として貴重だった。

その後、昭和17年(1942)4月18日の東京にはじめてアメリカ軍機による空襲が行われた際に、工場は爆撃による被害はなかったが、この時の惨事を目の当たりにする。葛飾区上空に飛来したB25は、軍事施設と見誤ったのか水元国民学校に機銃掃射を加え、当時14歳の石出巳之介君が被弾してしまう。急ぎ三菱製紙中川工場の医務室に運び込まれ、処置が施されたが助命することはできなかった。今年、戦後75年という節目になるが、平和へ願いを込めこの地が東京初空襲で犠牲となった石出君の絶命した場所であることをこの小文にも記しておきたい。

終戦間もない昭和22年(1947)9月19日未明、カスリーン台風によって葛飾区水元の桜堤が決壊、工場は水浸しになり、甚大な被害を受けた。戦後の深刻な石炭不足や資材統制もあって、災禍後の本格的な復旧は昭和25年(1950)まで掛った。その後、設備補強を遂げ、バライタ紙やアート紙を量産し、新たにOA関連の感熱紙インクジェット紙などの製造も手掛けるなどして操業を続けた。

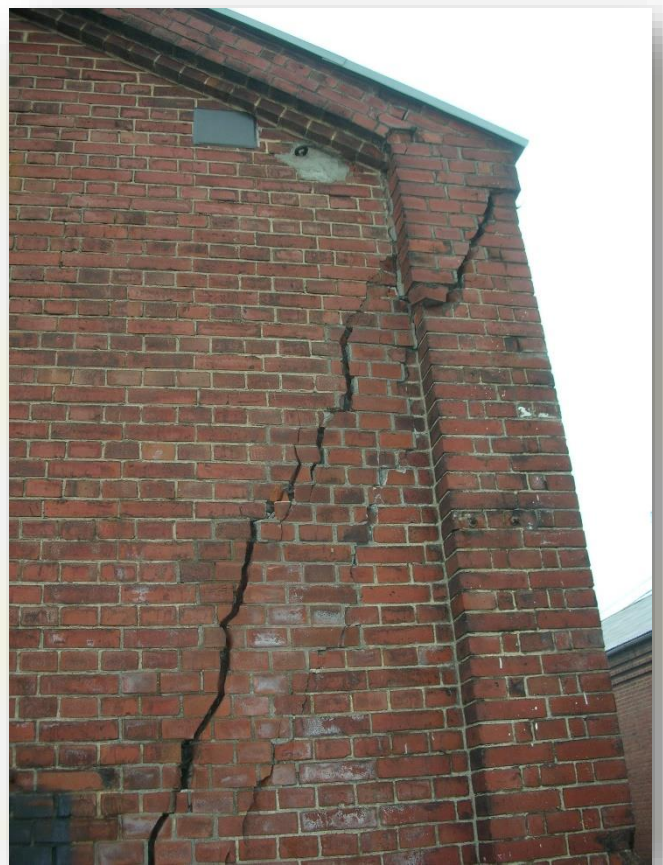


図4 関東大震災の時に生じたクラック

しかし、社会情勢の変化などもあって工場の移転が決まり、平成15年(2003)3月に三菱製紙中川工場は86年余りの歴史に幕を下ろした。その後、UR都市機構が土地を取得し、隣接する三菱ガス化学株式会社の工場も含めた土地区画整理事業や道路等のインフラストラクチャーの整備に着手。まちの骨格を整え、葛飾区、民間事業者とともに新しいまちづくりが進められ、「葛飾にいじゅくみらい公園」が誕生した。

かつて中川沿いには、三菱製紙中川工場をはじめとていくつかの製紙工場が操業していた。現在、それらの製紙産業は姿を消してしましたが、葛飾区の近代産業の幕開けの地であることと、かつての製紙産業を後世に伝える記憶装置としても「地球釜」は存在している。

本来なら葛飾区近代工業の発祥の地を記憶顕彰する土木遺産として、「地球釜」とともに煉瓦倉庫などの構造物を保存活用すべきだったのではないかと私は思っている。特に、工場建物の部材として用いられた煉瓦は、地元の金町製瓦会社で焼かれたものであり、葛飾の窯業との関わりを物語る貴重な土木遺産であった。

今後、煉瓦倉庫の壁面の一部はモニュメントとして公園内に設置されると聞いているが、かつての土地の記憶が消え失せぬように(図5)、この土地の有する土木遺産的価値を活かした再整備を期待している。きっと区民にとって過去・現在・未来に思いを馳せられる魅力ある「場」となろう。



図5 引き込み線跡 金町駅と公園を連絡する道は、かつて軌道が敷設されていた。まだ土木遺産を構成する要素が現地には残されている。